

令和元年6月13日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02656

研究課題名(和文)「『経験』と『知識』に基づく文法」構築のための機能類型論的国際共同研究

研究課題名(英文) International cooperative studies on a grammatical model based on "experience" and "knowledge" from functional-typological perspective

研究代表者

田中 慎 (TANAKA, Shin)

慶應義塾大学・文学部(日吉)・教授

研究者番号：50236593

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は「『知識』と『経験』がどのように個別言語で言語化されているか？」について日本語、ドイツ語を中心に、国内外の研究者とともに共同研究を行うことを目的としたものである。『知識』と『経験』との関係を対照するための言語横断的な共通プラットフォームとして「単純判断」(thetic judgment)と「二重判断」(categorical judgment)というドイツ語圏で提案され日本語研究の成果と組み合わせる形で発展してきた概念に基づいて研究を進めた。具体的には「『経験』と『知識』を反映するものとしての文法形式」について、海外の共同研究者たちとともに複数のワークショップを企画催し議論を進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1. 個別言語研究に基づきながら言語普遍を追求する国際共同研究：研究の中心概念である『経験』、『知識』は、特定言語に縛られていない人間の一般的生理学的特徴に立脚したものであり、機能的普遍性を追求する研究である。国内外の研究者との連携によって行われる国際共同研究である一方で、異なった分野を専門としている研究者の共同という学際的研究でもある。
2. 若手研究者育成を念頭に置いた共同研究：言語学は積み上げを前提とした学問であるが、一大学で言語学諸分野の研究者が在籍することが困難になっている。この状況は日本だけでなく他の国も同様であるが、本研究はそれを克服する共同研究の在り方を探っている。

研究成果の概要(英文)：Our research project, consisting of researchers of German linguistics in Germany and Japan, investigates how one's "experience" and "knowledge" is realized in individual languages. As a first step, to deal with such a wide-ranged problem, we decided to set a notion "thetic and categorical judgment" as a platform for the language comparison. The thetic-categorical distinction, which is firstly introduced by two German-speaking philosophers at the end of the 19th century and developed in combination with important achievements of Japanese linguistics in the second half of 20th century, can be regarded as a fundamental distinction of human judgments which has corresponding manifestations crosslinguistically. We then held some workshops on relating themes, namely, the thetic and categorical judgment as grammatical phenomena reflecting distinction of "experience" and "knowledge". The results of these workshops are now prepared to be published.

研究分野：ドイツ語学, 言語学, 統語論

キーワード：thetic judgment categorical judgment German syntax contrastive syntax particle wa  
finiteness linguistic typology Japanese syntax

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

言語には話し手の『経験』とその経験が集積された『知識』を表すしくみが言語横断的に存在する。この『経験』と『知識』を軸とした言語のしくみは、近年、さまざまな研究者によって、言語における各レベル(文、語、テキスト)の現象が報告されている。Kotin (2014) は、ゲルマン語におけるコピュラ動詞(ドイツ語の sein や英語の be)のパラダイムは、三つの異なったアスペクトを持った動詞の補充形式(suppletion)であることを示し、コピュラ動詞には異なった「存在のあり方」がコード化されていることを示した。また、Kotin の議論を踏まえた Leiss (2015) は、これらのコピュラ動詞が『経験に基づく存在』と『知識に基づく存在』という(少なくとも)二つの存在形式を言語化していることを示している。これは、例えば現代スペイン語のコピュラ動詞に見られる機能分担(一時的な状態を表す estar (Está guapa.彼女は(今)美しい)と恒常的な属性を示す ser (Es guapa.彼女は美しい))にその片鱗を残している現象である。この区別は、「話し手の直接の経験(典型的には話し手の観察)に基づくもの」と「それを抽象化した知識に蓄えられているもの」との対立と見なすことができる。

これらの言語における機能的な対立は、これまで中世のモディストによる普遍文法研究や、ローマン・ヤーコブソン、ド・ソシュール、近年ではヴァインリヒ、黒田などに様々に提案されている。研究代表者自身本人も、Tanaka (2011) において、「テキスト内における二つの指示のストラテジー(ダイクシス、アナファー)が言語によって異なる分布を示し、それがテキスト構造および文法全体に影響を及ぼす」というテーゼを提示している。本研究も、そのテーゼに基づいて行われた数々の研究(例えば申請者自身による科研費研究「ダイクシス、アナファーに基づくテキストの構成原理についての機能類型論的研究」(2013~2015)も含む)を引き継ぐものと位置づけられる。

本研究は国際共同研究としての性格を持っているが、その母体となるのが、2015年8月にドイツ・ミュンヘン大学において同大学ライス教授とともに共同開催した国際言語学サマーコースである。本サマーコースは若手研究者を育成する目的で行われたものであるが、講師として申請者を含め8カ国から10名の研究者が集結し2週間にわたり集中的な共同研究を行った。当研究計画は、その成果をさらに発展していくために実行されるものであり、ミュンヘン大学の Leiss 教授、ウィーン大学、グローニンゲン大学名誉教授の Abraham 教授、ジェローナ・ゴラ大学(ポーランド)の Kotin 教授、トリエント大学(イタリア)の Bidese 教授らをはじめとする国際的なドイツ語・ゲルマン語研究者との緊密な連繫において行う。

## 2. 研究の目的

本研究は、「『経験』と『知識』をコード化する手段としての文法体系」という仮説に基づき、機能主義的言語普遍を求めながらその個別言語的な現れについて国際的な枠組みでの共同研究を進める試みである。本研究の特徴として、以下の三点が挙げられる。

- (1) 文法システムおよび辞書システムは『経験』と『知識』をコード化する体系であると考え、それに基づいて個別言語的な実現形式(実際の言語使用)を記述していく機能類型論的な研究であること。
- (2) 日本語、ドイツ語の対照を基軸として、タイ語、中国語などのアジア言語、英語、フランス語などのヨーロッパ言語の文法体系について広範な共時的対照研究を行うこと。
- (3) 上記の目的を達成するために、10年以上にわたり共同研究を行っている8カ国にわたる研究者との国際共同研究であること。

### 3. 研究の方法

本研究は、『直接の経験』と『抽象的な知識』に基づく文法、語彙現象について個別言語的な分析を通してその機能に基づいた言語の新しい普遍性の形を提案するものである。その際、個別言語の各レベル（テキスト、文、語）での分析が前提となる。その際、2013～2015年度まで申請者および海外研究者とともに実施される科研費研究「ダイクシス、アナファーに基づくテキストの構成原理についての機能類型論的研究」(#25370463)を踏まえた形で研究を進めていったが、それらの研究者との議論を進めるうちに、文レベルでの『直接の経験』、『抽象的な知識』との関係を言語対照、類型論的研究を行うための言語横断的な共通のプラットフォームとして「単純判断」(thetic judgment)と「二重判断」(categorical judgment)という19世紀以降ドイツ語圏で提唱されつつ20世紀の後半に日本語研究の成果と組み合わせる形で発展してきた概念について共同で研究を進めることになった。

具体的には、次の二つの問題設定がなされた：

- (1) 対象となる言語（主なターゲットは、ドイツ語、日本語であるが、その他海外の研究者の参加により、中国語、英語などに対象を広げた）において「単純判断」(thetic judgment)と「二重判断」(categorical judgment)がどのように実現されているか？
- (2) これらの『経験』と『知識』を反映するものとしての文法形式が他の類似した分類（例えば stage level – individual level, 分析文と統合文などの対概念）とどのような関係にあるのか？

これらの観点から、二重判断、単純判断の在り方について海外の共同研究者たちとともに期間中複数のワークショップを各種国際研究集会にて企画し、議論を進めていった。

### 4. 研究成果

以下に上述の研究目的を達成するために行った研究を時系列的に整理し、その内容を紹介していく。議論の詳細については、下述されている各論集にて公刊する予定である。

研究初年度（2016年度）は、『経験』と『知識』という二分法を、これまでの言語研究において提案されてきたさまざまな概念と突き合わせて、本研究の核となる概念である「経験と知識の言語化」をより明確に規定すべく、以下の機会について国際共同研究を行った。

・2016年8月：ドイツ、ミュンヘン大学 Leiss, Abraham 両教授および Parawang, Kurita 両博士とともに数回にわたり会合を持ち、研究論集の編集を行った。同論集の中心となるテーマは、「言語においてどのように『経験』と『知識』のコード化が行われているか」ということであるが、この問題について、特にコピュラ文、存在表現などを中心に日独対照の研究を進めた。

・2017年2月：千葉大学人文社会研究科にて、プロジェクト論集『証拠性表現としての推量の分類 Inference と Assumption』を編集、出版した。この論集においては、『経験』に基づく推論である Inference と『知識』に基づく推論 Assumption の言語的実現形式について、ドイツ語、日本語、英語、中国語、タイ語などのデータをもとに分析を進め、本研究における理論的枠組みの強化を目指した。

・2017年2月：ミュンヘン大学 Leiss, Abraham 両教授、東京外大藤縄准教授（当時）と、日本語、ドイツ語における二重判断 (categorical judgment) と単純判断 (thetic judgement) の対照分析を集中的に行った。これらの概念はと、本研究の主題である『経験』と『知識』の言語化の関連性について集中的に議論を行った。

研究2年目(2017年度)は、「知識」と「経験」との関係を、主に「二重判断」(categorical judgment)と「単純判断」(thetical judgment)という19世紀以降ドイツ語圏で提唱されつつ20世紀の後半に日本語研究の成果と組み合わせる形で発展してきた概念から整理を行い、国内外のさまざまな研究集会で研究発表を行った。

・2017年9月：日本独文学会言語学ゼミナールにて、二重判断，単純判断についての研究発表を行った。その際，藤縄教授（東京外大），Meienborn教授（ドイツ，チュービンゲン大学）らと集中的な議論を行った。

・2017年9月：東京外大の研究ワークショップで，藤縄教授，尾上名誉教授（東京大学）らと二重判断，単純判断についてのシンポジウムを行い研究発表を行った。

・2017年9月：ミュンヘン大学 Leiss 教授，ウィーン大学 Abraham 名誉教授および東京外大藤縄教授とともに共同で編集した論集を公刊した。同論集内で田中は「単純判断」「二重判断」についての類型論的な考察を提示した。

・2017年12月：オーストリア言語学会（Klagenfurt）で，ミュンヘン大学 Leiss, Abraham 両教授，東京外大の藤縄教授らとともに，二重判断，単純判断についてのワークショップを開催した。本ワークショップでは，二重判断，単純判断の日本語，ドイツ語における具体的な実現形式とその機能について集中的な議論を行った。ここでは，日独で確認された，二重判断，単純判断の実現形式とその機能について，翌年（2018年）に対象言語を広げてヨーロッパ言語学会でさらなる議論を続けることが提案され，そのための準備の話合いが集中的に行われた。

・2018年2月：ドイツ・ミュンヘンにてミュンヘン大学 Leiss, Abraham 両教授と話し合いを行い，2017年12月に行ったシンポジウムにおける成果をドイツの研究出版社 Buske 社より公刊するべく準備を進めた。これらの国際研究集会等を通して，本計画研究を非常に高い成果を挙げている。

研究最終年度（2018年度）は，本研究のテーマである「『経験』と『知識』を反映するものとしての文法」についての研究の成果発表をさまざまな形で行った。

・2017年12月に本研究の枠組みで共催したワークショップ（オーストリア言語学会（クラゲンフルト））"Thetisch-Kategorisch, Stage-Individual, Schwach-Stark- Quantifikation, Common ground und Milsarks Generalisierungen"の研究成果を公刊するために編集作業を進めた。同論集は，2019年夏に出版予定。田中は，本論集に論文"Thetik/Kategorik als funktionale Kategorie: Funktional-universale Satzstruktur"を寄稿。

・2018年8月に行ったヨーロッパ言語学会（タリン・エストニア）にてワークショップ"thetics and categoricals"を開催。本ワークショップでは，日本語，ドイツ語，英語，中国語などの各個別言語で，二重判断，単純判断の区別が言語的に実現されているか，されていない場合は，類似した区別がなされているかなどを中心に議論を進めた。本ワークショップの論集の編集を現在進めている。編集作業と並行して，本研究で行った共同研究の枠組みを広げ，日独を超えた国際的な共同研究へ広げていくべく，話し合いを進めている。田中は，上記ワークショップ"thetics and categoricals"を共催し，"b-grade subject and theticity"というタイトルで発表を行った。

・2018年10月にオーストリア言語学会（インスブルック）にて田中は，"Eine an Universalität orientierte Textgrammatik: Satzaufbauprinzipien aufgrund der Thetik-Kategorik-Distinktion"というタイトルで発表を行った。ここで，二重判断，単純判断という区別が，テキスト構造を視野に入れた言語の構造記述のために非常に有望な概念であるということを提唱した。

〔成果公刊論集〕(計4件) および は、それぞれドイツ他の出版社から出版される予定で、現在編集を進めている)

田中慎(編), 人文社会研究科研究プロジェクト報告書第316集 証拠性(Evidentiality)の日英対照研究とその教育への応用. Inference と Assumption の言語対照研究. 千葉大学人文社会研究院. 2017年.

Tanaka, Shin / Abraham, Werner / Leiss, Elisabeth / Fujinawa, Yasuhiro (編著): Grammatische Funktionen aus Sicht der japanischen und deutschen Germanistik. Linguistische Berichte Sonderheft 24. (Mitherausgeber: Elisabeth Leiss, Werner Abraham und Yasuhiro Fujinawa). Helmut Buske. 2017年.

Abraham, Werner / Fujinawa, Yasuhiro / Leiss, Elisabeth (編著): "Thetisch-Kategorisch, Stage-Individual, Schwach-Stark- Quantifikation, Common ground und Milsarks Generalisierungen". Stauffenburg-Verlag 社より 2019年夏出版予定.

Abraham, Werner (編著): Thetic and categorical judgment(仮題). John-Benjamins 社より 2020年出版予定.

5. 主な発表論文等(本研究に直接関係あるもののうちの2019年5月現在既発表のもののみを記載)

〔雑誌論文〕(計2件)

Tanaka, Shin, Einleitung. in: Tanaka, Shin, Elisabeth Leiss, Werner Abraham, Yasuhiro Fujinawa (Hg.) Grammatische Funktionen aus Sicht der japanischen und deutschen Germanistik. Linguistische Berichte Sonderheft 24. Helmut Buske. 査読有. 2017. 7-14.

Tanaka, Shin, „Suche nach latenter Invarianz bei genetisch fremden Sprachen am Beispiel Deutsch-Japanisch“ 同上書. 査読有. 2017. 59-74.

〔学会発表〕(計4件)

Tanaka, Shin, Eine an Universalität orientierte Textgrammatik: Satzaufbauprinzipien aufgrund der Thetik-Kategorik-Distinktion. bei: 44. Österreichische Linguistiktagung. Oktober 2018. Universität Innsbruck. 2018年10月.(ドイツ語)

Tanaka, Shin, “B-grade subjects” and Theticity. bei: Societas Linguistica Europae. 51th Annual Meeting. 2018年8月. University of Talinn. (英語)

Tanaka, Shin, „Thetik/Kategorik“ als funktionale Kategorie: (Un)markiertheit der Kategorik/Thetik. bei: Workshop „Thetik – Kategorik“, 43. Österreichische Linguistiktagung. 2017年12月. Klagenfurt: Universität Klagenfurt. (ドイツ語)

田中 慎, ドイツ語 V2 と日本語「は」における機能的・構造的等価性について: 二重判断の言語化. 於: 東京外国語大学国際日本研究センター対照日本語部門主催 『外国語と日本語との対照言語学的研究』 於: 第22回研究会. 2017年9月. 招待講演.(日本語)

〔図書〕(計4件)

1. TANAKA, Shin, Grammatische Funktionen aus Sicht der japanischen und deutschen Germanistik. Linguistische Berichte Sonderheft 24. (共編著, 共編著者 Mitherausgeber: Elisabeth Leiss, Werner Abraham und Yasuhiro Fujinawa). Helmut Buske. 2017.

2. TANAKA, Shin, Kasus und Raumwahrnehmung im Sprachvergleich. in: Ogawa, A. (Hg.). Raumerfassung – Deutsch im Kontrast. Tübingen: Stauffenburg.2017. 97-110.
3. TANAKA, Shin, Deiktisch basierter Aufbau von Sprache im deutsch-japanischen Kontrast. in: A. Krause / G. Lehmann, W. Thielmann / C. Trautmann (Hg.). Form und Funktion. Festschrift für Angelika Redder zum 65. Geburtstag. Tübingen: Stauffenburg. 2017. 207-216.
4. TANAKA, Shin, Das kategorische Urteil im Spiegel der Grammatik: Deutsch-Japanisch-Kontrast. in: Zeman, S. / Werner, M. / Meisnitzer, B. (Hg.). Im Spiegel der Grammatik. Beiträge zur Theorie sprachlicher Kategorisierung. Tübingen: Stauffenburg. 2017. 263-276.